

氏名(本籍)	はら 原	なつこ 奈津子(長野県)
学位の種類	博士(文学)	
学位記番号	博乙第1762号	
学位授与年月日	平成13年9月30日	
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当	
審査研究科	心理学研究科	
学位論文題目	受け手のムードが説得過程における情報処理と説得の受容に与える影響	
主査	筑波大学教授	文学博士 山本真理子
副査	筑波大学教授	博士(心理学) 吉田富二雄
副査	神戸大学教授	教育学博士 海保博之
副査	筑波大学助教授	博士(心身障害学) 長崎勤

## 論文の内容の要旨

本論文は、受け手のムードが説得過程に与える影響について、説得的メッセージの処理方略に与える影響と、説得の受容に与える影響との2側面からとらえようとしたものである。

本論文は3部構成によりなる。まず第1部において、ムードが認知や社会的行動に与える影響を扱った関連研究の知見に基づいて、説得過程におけるムードの機能について理論的検討を行った。第1章では説得場面とは無関係に喚起されたムードが、説得過程全般における認知反応にどのような影響を与えるかを検討することの必要性が示された。第2章、第3章では、ムードが認知や社会的行動に与える影響を扱った関連研究について、次の2つに区別して理論的整理と本論文での問題点の整理を行った。

- (1) ムードが情報処理方略に与える影響に関する研究
- (2) ムードが情報処理内容に与える影響(気分一致効果)に関する研究

第4章では、説得過程全般において受け手のムードがどのような影響を及ぼしうるかを、上記の2つの影響から整理し、本論文での検討課題として次の2点が示された。

- (1) ムードが説得における情報処理方略に与える影響の検討。
- (2) ムードが説得の受容に与える影響とそのプロセスの検討。

第一の検討課題については、「ネガティブムードがメッセージ内容に基づいた態度変容を生起させる」という従来の知見について、処理資源配分の観点も加えて再検討することの必要性が指摘された。また、第二の検討課題は従来の研究で十分に検討されていない問題であり、受容への影響がどのようなパターンで現れるのか、またどのような生起プロセスによって媒介されているのかを検討する必要性が指摘された。

このような第1部での議論に基づき、第2部では実証的な検討がなされた。

まず、第5章、第6章では第一の観点であるムードがメッセージの処理方略に与える影響について検討を加えた。ここでは、制度や慣習をめぐる争点がメッセージとして用いられた従来の研究に対し、メッセージの形態が異なっても同様のムードの機能がみられるか否かを検討するために、商品広告を説得的メッセージとして用いた。また、ネガティブムードが中心的ルートによる態度変容を生じさせるという先行研究の知見の再現性、一般性を認識することを目的として、説得話題への関与度、ネガティブムードの種類などを変化させた。さらに、メッセージの処理方略に関する指標として、メッセージ内容についての思考や記憶成績なども取り上げ、多面的に検討を

加えた。その結果、ポジティブムードを喚起された受け手が、説得的メッセージの論拠の強弱に対して弁別的な反応を示さないこと（研究1, 4）、思考数がネガティブムード条件に比べ少なくなること（研究2, 研究6）から、ポジティブムードが周縁的ルートによる態度変容を生起させることが検証され、先行研究で示されたポジティブムードの機能が広告を用いた説得場面においても改めて認識されたといえる。

一方ネガティブムードについては、第5章において、メッセージ内容に基づいた態度変容を生起させることが、論拠の強弱に対する弁別的な反応や思考数などへのムードの影響から示唆された。このような効果は、メッセージを広告の形式で示した場合にも（研究1, 2, 4）、また説得話題への関与度が低い場合にも（研究3）、喚起されるネガティブムードの種類が異なる場合にも（研究4）、認められた。さらに第6章より、ネガティブムードを喚起された受け手が送り手の専門性（研究5）や信頼性（研究6）に影響されやすいことが示された。つまり、ネガティブムードは、従来の知見とは異なり、送り手に関する情報などの検討も含めた「詳細処理」を生起させる効果を持つことが明らかにされた。

第7章ではムードが説得の受容にどのような影響を与えるかという第二の観点について検討がなされた（研究7）。その結果、ポジティブムードが説得受容を促進する効果が認められた。さらに、その効果が、思考内容に好意的なバイアスを生じさせるプロセスと、錯誤帰属によるプロセスの2つのプロセスによって媒介されていることが示された。一方、ネガティブムードが説得の受容に与える影響については、顕著な影響は見いだされなかった。このような現象は、第5章、第6章で示されたネガティブムードによる詳細処理の傾向が、説得場面においてメタ認知的に作用し、説得の受容に与える影響過程が調整される可能性を示すものとして解釈された。

第8章ではネガティブムードが詳細処理を促す効果について、処理資源配分の観点から検討を加えた。そこで第8章ではまず、ムードの生起原因への処理資源配分を要求するようなムード場面を特定することを目的とした。さらに相対的に説得への処理資源配分が抑制された場合、ネガティブムード条件においてもメッセージの詳細処理が抑制されるという可能性を検討した。場面想定法を用いた研究8では、特定の状況で経験されるネガティブムードは、その後の説得場面に対する集中を妨げる可能性が示された。また研究9においては、ネガティブフィードバックなどによってネガティブムードを喚起された条件では、メッセージについての再生数が有意に少なく、また、実験に対する認知的努力の自己報告についても他の条件にくらべ低い傾向がみられ、ネガティブムード条件においては説得場面へとうまく処理資源が配分できず、そのため詳細処理が抑制されたものと解釈された。

第3部では、第2部で得られた知見についての総括を第9章で行った。まずポジティブムードについては、周縁的ルートによる処理方略を生起させることが示され、さらに説得の受容を促進する効果が認められた。そして、このような効果は、ポジティブムードが強くなればなるほど、メッセージ内容に関する思考へ好意的なバイアスを生じさせたり、ポジティブムードが錯誤帰属のプロセスによって周縁の手がかりとして作用したりすることによって媒介されていると解釈された。一方、ネガティブムードについては、メッセージの内容のみならず、送り手の専門性や信頼性といった周縁の手がかりの検討も含めた、より広範な情報処理を生起させることから、ネガティブムードは「詳細処理」を生起させる効果を持つことが本論文によって示された。しかし、自己やムードの生起原因に処理資源の配分が必要とされるような状況ではむしろこの詳細処理が抑制されるのではないかという可能性も示された。

本論文で新たに検証されたムードの機能についてまとめると、以下の2点に整理される。

- (1) ポジティブムードが説得の受容を促進する効果を持つこと。また、その効果が好意的な思考バイアスと錯誤帰属のメカニズムによって媒介されること。
- (2) ネガティブムードが詳細処理をもたらすこと。ただし、自己やムードの生起原因に処理資源を要するネガティブムードが喚起されているときには、メッセージの詳細処理がかえって抑制されること。

つづく第10章では今後の課題について整理し、第11章では本論文の知見をふまえながら、説得研究の展望を述べた。

## 審査の結果の要旨

本論文は、ネガティブムードとポジティブムードを比較しながら、ムードが社会的情報処理に及ぼす影響を、説得の受容過程を中心に検討を行った。このトピックは、社会心理学研究としてはまだまだ検討が始まったばかりであるが、ひとの社会的判断や行動を理解するためには、重要なトピックであるといえる。これまでの研究ではムードが情報処理方略に与える影響についてのみに研究の焦点があてられていた。それに対して、本論文は従来の知見に新たな理論的枠組みを持ち込み、ムードが説得の受容そのものに与える影響についても検討を加え、ムードの影響過程をより包括的にとらえようと試みたものである。その結果、ポジティブムードについては、説得の受容を促進する効果を持ち、その効果が好意的な思考バイアスと錯誤帰属のメカニズムによって媒介されるという知見を示した。また、ネガティブムードは詳細処理をもたらすが、自己やムードの生起原因に処理資源を要するネガティブムードが喚起されているときには、メッセージの詳細処理がかえって抑制されることを新たに指摘した。

このように、本論文は従来の研究知見を丁寧に確認、整理すると同時に、ムードが説得の結果に及ぼす影響についての検討を新たに加え、また、従来その効果についての理論的説明が不統一であったネガティブムードの効果についても、新たな説明を試みようとした意欲的な論文であると言える。このような観点から、本論文は高く評価される。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。